

「見えない相手に声を届ける術を教えてください！」と書いてから1ヶ月が過ぎた7月8日、とうとう政府と東電に行ってきました。自分たちの直面している現実が、あまりにも政府に届いていないことにたまらなくなり、中間指針が発表される前に私たちの声を取り入れてもらいたいと、直接行動として中小の商工業者67名が2台のバスで政府と東電に要望書を手渡しに行ったのです。

政府の行き先は、原発担当大臣、経済産業大臣、文部科学大臣、原子力紛争委員会、総理大臣の5箇所、そして東電の社長、その中で直接本人に会えたのは文部科学大臣だけでしたが、すべてが初体験。一箇所ですべての代表人数は最大20人と決まっております（私たちは21人まで許してもらえた）残りは裏口に駐車させられたバスの中で待機ということが到着寸前に分かり、理不尽さを感じましたが、（あちらにとっては常識なので、私たちが全員建物の中に入れると思っていたことに当惑し、お世話をしてくれた地元議員の秘書さんに「お伝えしてなくてすみません」と謝られました）急遽、全員がどこか一箇所には必ず入ることを前提にグループ分けをして、それぞれが、それぞれの場所で、南相馬の現実を伝え、疑問を口にし、返答を求めました。

声は挙げるべきです。声を挙げてみると、相手との微妙な温度差が見え、自分たちの要望がどの程度受け入れられるかを肌で感じられるのです。直接陳情を全員が体験し「すべてはこれから」という想いを胸に、朝5時から夜中11時半まで往復11時間をかけて上京した陳情の旅は終わりました。

南相馬の市民は以前にも増してストレスを溜めています。放射能汚染が日に日に確実になっているからです。地域全体を覆っている出口の見えない状況に生きるエネルギーを吸い取られていくようです。この地を訪れた人々は皆一様に「なんでもないんですね」と言います。表面に見えない放射能が人の心や体を不安に陥れている状況をどう伝えるのか？私たちは新たな課題に直面しています。そんな中、エネシフジャパンという勉強会のグループから原稿依頼があり書きました。タイトルは「原子力で電気をつくるのはやめてください。放射能汚染によってふるさとを奪われた福島県民の苦しみを思え！」としました。800字の文章の最後を紹介します。これが、私の今の気持ちです。

「4ヶ月たった今、放射能汚染の不安は私たちの心と体を蝕んでいます。目の前にあるふるすとは、見た目は何も変わっていないのに手を触れることを許されない場所になってしまったのです。この苦しみと悲しみを外側の人に分かってもらう難しさに福島県民は喘いでいます。希望を失った住民の中には自ら命を絶つ人も出てきはじめています。

皆さん、惑わされないでください！声高に叫ばれる「節電」の掛け声は、あたかも原発がなければ切り抜けられないような雰囲気醸し出していますが、放射能という人間がコントロールできない物質を使った発電は、あなたの人生を根底から壊してしまう恐ろしい発電方法なのです。あなたの住む地域にそれが無くても、今の日本ではその被害が及ばない地域は無い程に存在してしまっているのです。原発をストップさせることが日本の未来を守ることです。

安全安心の持続可能な新しいエネルギーにシフトしてゆくスタートラインは一人ひとりの意識の変換からです。その行動の第一歩として「フクシマ」の実状をしっかりと知ってください。私たちはあきらめずに発信してゆきます。」

7月14日

追伸

「あんだんて」という地元の短歌のグループが合同歌集の第三集として「今フクシマから」を発行しました。それぞれの震災・原発事故体験が31文字とエッセイに込められた貴重な歌集です。本店に置いてありますので、是非ご一読ください。

死なぬもの産み付けられて孵化したり五十四個の卵の四つ
ことごとくネガのごとくも競争と効率の果てに汚染せるまち

鎌田智恵人

窓閉めてエアコン消して霞食え屋内退避は命令ばかり
福島で役立つ人になりたいと消えた校舎に刻む子がいる

志賀邦子

放射能濃くただよえる村里をよぎる生死の水際をよぎる
両手延べ立つときふとも思ふなり被爆検査は十字架のかたち

遠藤たか子